革命エデュケーション

前説

an introductory remark

【目次】

■

3 「革命エデュケーション」前夜

■ ■

9 お金で投票する社会

■ ■ ■

15 〈近海の漁場〉から〈外洋〉へ

■ ■ ■ ■

「革命エデュケーション」前夜

細井　今回、鵜川さんと僕で『革命エデュケーション』という新企画をスタートすることになったんですけど、内容は本編を読んでいただければいいとして、一応サブテキスト的なものというか、この企画の成り立ちとか目指すべき地平(笑)とかについて、簡単に話しておけたらいいなと思って。

鵜川　そもそもの企画のスタートは、「授業でやってることと、生身の現実の距離が開きすぎじゃない？」というところですよね。特に、現代文の授業で用いている〈ものの見方〉は、単に評論の問題文を読む時だけ限定のものじゃないのに、なぜかそう考えてはくれない。どうも、

そういう傾向は現代文に限ったことでもないようですが、まじめなのかなんなのか、勉強は勉強、日常は日常って、割り切ってる感じがするんです。日常の現実を切り取っていくのが学問だっていうのに。

細井　そうそう。現実と切り結ぶためのツールであるはずの思想が、生徒たちにとっては完全に日常から乖離したものになっていて。だから、今話題になっている事象――例えば iPad だったり原発関連だったり AKB だったり――を語ることによって、授業と現実をくっつけるというのをやりたい、てのが動機ですよね。

あとは、僕たち教員が考えてることって、意外と生徒に伝わってない。もちろん生徒の考えてることを教員がわかってないという、その逆の状況もあるし、誤

配も含めてコミュニケーションなんだけど、「オレはこーゆーこと考えてますよ」てのを伝えるメディアがあってもいいのかな、というかあるべきだろう、てところから始まってる感じですかね。あと、僕としては授業や HR とは少し違った立ち位置で語れる場というのがあるといいな、とは思ってました。どうしても今言った二つだと、自分の話したことが「結論」になってしまうので。

鵜川　そうですね。確かにそれがカッコつきの「結論」に過ぎなかったとしても、生徒はそれを「正解」にしてしまう。考えてもらうために投げてることでも、そうです。

　それに、授業や HR で AKB に触れたとしても、「おお、先生も好きなんすか」みたいな反応しか得られないんですよ

ね。そうじゃなくて、AKB も社会問題も同じ土俵で扱えるんだよ、ということが言いたい。ある特定の領域の趣味しか受容しない人も、一部の趣味に過剰に攻撃的になる人も、もうちょっと冷静になろうよ、と。好きは好き、嫌いは嫌いとして、でも語るべきものがそこにあるでしょう、と。その辺についての考え方がすごく固い。まだ若いのに(笑)。

細井　ああ、それはわかります。AKB の話でも、「先生、AKB なんか好きなんですか」か「で､推しメンは誰ですか？」みたいな二極化した反応になっちゃう(笑)(注：ちなみに細井の推しメンは北原里英)。「何を好きか？」が先に来ちゃって、興味・関心のあり方を共有するという感じにならないんですよね。だから AKB の例で言うと、僕はメンバー個人

に対する興味というより、それを受容するファン（というかヲタ？）とか、受容のされ方に興味があるんですよね。それは他の対象に対しても言えることで、その意味では、ここで話題に上がることってのは､あくまでも｢素材｣なんですよね。だから、半径 10 メートル以内の身近な事象を扱うことで理論を実践する、みたいな感覚ですね。

鵜川　そうですね。それに加えて、「半径 10 メートル以内」を客観視する視点を養うことで、今いる、守られたサークルから外へ向かう一歩も引き出したいですね。例えば「ラノベ」が偏見にさらされていることに反発する生徒は、自分自身が「ラノベ」以外に対して偏見を持っていることに気付かない。僕自身は「ラノベ」というレッテルが、作品の良し悪

しを決定づけるものではないと思っているので、「ラノベ」の中にも語るべき作品はあると思っていますが、当然「ラノベ」の外にはさらにたくさんの語るべき作品がある。この場で、授業では扱いきれない具体的な作品や作家、あるいはジャンルを取り上げることで、そのサークルからの越境をガイドしたい気持ちもあります。

細井　それはありますね。今のラノベの話じゃないですが、情報の細分化と生徒の十代半ばという年齢もあって、各個々人がそれぞれのクラスタの中で自閉してしまっている感じがするんですよね。面白いものは他にもいろいろあるよ、ってのをお節介ながら提示していけたらという。

最後にもう一つだけ言うと、生徒の世

の中の見方みたいなものがすごく硬直化してる、と感じることがあるんです。「善／悪」とか「抑圧／非抑圧」みたいなわかりやすすぎる二元論だったり、あるいは「教員はオレたち生徒を抑圧する存在」みたいな世界の捉え方。古典的と言うよりはもはや牧歌的という域です。そーゆードラマとかマンガ雑誌的な捉え方だったり、ワイドショーに出てる人を「知識人」と思っているようなのとは違った観点なり発想なりを見せたいというのもありますね。

お金で投票する社会

細井　さっきの日常とのコネクション、て話で言うと、僕たちは毎日何かしら「モノ」を買ってるわけですが、それがある

意味では直接的な形での社会との接触になってる部分がある。つまり、おにぎりを買うときにセブンイレブンで買うか、ローソンで買うか、本人は大して意識してないだろうけど、「セブンに 100 円」「ローソンに 100 円」という形で現れるわけですよね。そのことはもっと気にしていいことだと思う。

鵜川　確かに、個人の身振りが社会——とりわけ消費社会に直結している点は、よく考える必要がありますね。しかも、その身振り自体が制限されているにも拘らず、あたかも自由な選択の産物のように思われている。例えば、Amazon で提示される「おすすめ商品」で知った商品を購入するということがどういうことか、少し立ち止まって考えてほしい。

その一方で、AKB の売り方なんかは、

そのあたりがはっきり表れている気がします。購買する「層」に対する戦略だけじゃなくて、その中の一部の層が、よりたくさんのお金を落としてくれるような仕組みを考えている。その結果、八十年代までのアイドルを取り巻いていたファンクラブ的なヒエラルキーとは全く別の形でヒエラルキーが形成されている。それを全てお金に還元するつもりはありませんが、消費行動に結び付けられていることは確かだと思います。

細井　消費行動ということで言うと、生徒の年代だと当然ながら選挙権がない。そうすると、社会と直で関わるのって、消費行動ぐらいしかなかったりするわけです。そこで単純に「安さ」とか「手に入れやすさ」という基準で買い物をすることの恐さというのを感じますね。

あとはもう一つ、「自由」の問題ですよね。これは現代社会を語る上での大きなトピックなので、また違う形で議論することになると思いますが、Amazon の話にしても、一見自由でありながら、ものすごく狭い範囲での自由、あるいは本人が思い込んでいるだけの自由でしかないんですよね。

鵜川　確かに自由の享受の仕方に、危うさは感じます。Amazon のことを言ってしまうと、「おすすめ商品」によって購買衝動が生まれることに対する疑問があまりない。もしもその商品を知らなければ、当然、欲求は生まれなかったわけですよね。最小限の行動で、次々に商品と出合えてしまうということは、単に便利というのでは済まされない、ということぐらいは考えてほしいです。

それと、社会と消費行動によってしか関われない年代、というのは、重要視すべき話題であると思います。小さな頃から社会の中に消費者として組み込まれているというのは、例えば僕ら以前の世代が、近所の駄菓子屋で小遣いを使うのとは全く異なる意味を持っている。そこには、お金のやり取り以前の言葉のやりとりがない。これ以上話すと、「昔はよかった」的定型ノスタルジーにしかならないのでやめますが（苦笑）。

細井　それはそれとして、AKB の選挙はこのことを結果的にハッキリと見せているわけですが、やっぱり「モノを買うこと＝一種の投票行動」だと思うんですよ。商品そのものだけじゃなくて、その背後にある企業の理念とか思想とかに対する評価も含んだ。消費行動にはそうい

う意識が必要だと思う半面、その選択の幅というのが問題になると思います。生徒たち（だけに限らないかもしれませんが）は自分たちが「自由」に消費行動を行っていると思っているけれども、それはただ単に外部を知らなかったり、自分たちの価値観が何かによって縛られていることに気付かなかったり、ということなんじゃないかと。例えばさっきのラノベの話じゃないけど、知らないうちに「ラノベ的世界観」至上主義になっていて、その価値観で他ジャンルの作品を評価している可能性もあると。それと同様に、「おすすめ商品」的な世界の広がりというのは、一見世界を拡大してくれるように見えるけれど、どこかしら囲われた自由だと思うんです。現代の僕たちの置かれている状況については、「消費社

会」という広場の中に囲い込まれて、そこでは一定の「自由」は保障されているんだけど、絶対にそこから出られないというイメージを持ちますね。

鵜川　そうですね。冒険が極端に少ない感じはしますね。でも、それは単に「消費社会」に囲い込まれているから、というだけじゃなくて、今の情報過多の状況が多分に影響しているようにも思います。

〈近海の漁場〉から〈外洋〉へ

鵜川　学生は、自由にできるお金が少ないわけで、そもそも消費行動そのものは相当に制限を受けるわけですが、今は極端に情報が多いから、安全でそこそこ気持ちいい消費行動が取りやすい。ジャケ

買いなんかしなくても、とりあえずネットで視聴、あるいは YouTube で聞いて、気に入らなければ買わないということができる。僕らの頃は、それこそ CD 一枚買うのも冒険で、雑誌のレビューや店頭のポップ、そしてジャケット（！）を頼りに買うわけじゃないですか。で、失敗だったとしても、悔しいから聴き倒す。どこかいいところはないかと聴き倒す。そのうち、「あれ、こういうのもありだな」と思えてくる。すると、今まで聴いていた CD の聴こえ方も変わってくる。聴いてる絶対量（単純な情報量）は少なくても、その受け取り方が今とは違っているから、広がる可能性があるし、そもそも囲い込まれている感じは、今よりずっと少なかったと思います。

これは、単に「昔はよかった」という

話ではなく、消費のための情報が視聴覚両面で拡大する前と後とで、断絶があるように感じます。

細井　そうそう、情報の多さというのは、横断の難しさにも繋がってくるんですよね。例えば音楽なんかでも、アニソンならアニソン、K-POP なら K-POP という感じで、他ジャンルに向かわないというか。数が多いから、今あるものの周辺で OK みたいな感じになる。これは個人的な感覚ですが、今の生徒たちの世代は YouTube で聴きたい曲にすぐアクセスできていいなぁと思う半面、さっき鵜川さんが言っていたような、一枚のアルバムを聴き倒すとか、ジャケ写のアーティストのファッションをすごく細かく分析したり、歌詞カードを読み込んで、歌われている世界に対して想像（妄想？）

をふくらませたり……といったことは無くなってるのかなぁ、とも思います。

鵜川　今の生徒の行動様式それ自体は、消費や情報の形態によって、半ば必然的に生まれてきたわけですが、最も懸念されるのが、そんな風に閉鎖的になる趣味領域に対して、これを何とか打破したいと思っている人にとっても、それが非常に難しくなっているということです。

　僕は文芸部の顧問をやっているんですが、部員から「おすすめの音楽」を聞かれることが多くて、初めはいくつか提示するわけですが、それをした後は、生徒が自分で勝手に広げ始めるんですよね。だから、「いまここ」から外に出ることさえできれば、きっと世界を広げることは難しくはない（それこそ、情報はいくらでもネットに転がっているから）。で

も、その最初の一歩のきっかけをつかみにくい土壌があるんだと思います。

この『革命エデュケーション』は、その語る内容や語る身振りが、その一歩目を踏み出す助けになるだろうとも考えています。

細井　そうですね。広く深く行こうと思えば、いくらでも行けるわけで。その中で、今の自分の価値観や趣味とは違ったそれに出会い、違和感とか齟齬を感じながらも、自分の中に位置づけていってほしいなと思います。あとは繰り返しになりますが、授業や模試などで読むテキストの内容と、自分たちが今現在生きている実感を繋げるような、そのための『革命エデュケーション』にしていきたいですね。

ところで、「なぜこのタイトルなの？」

という疑問をお持ちの人もいるかと思いますが。

ちょっと解説すると、この対談企画のタイトル出し会議をしてたんですよね、鵜川さんと。実はそのあたりで東京事変の解散という出来事があり（実はけっこう昔からの企画だったことが明るみになりますが：笑）。で、僕はけっこう椎名林檎が好きなので、初期の彼女がよくやっていた『無罪モラトリアム』とか「丸の内サディスティック」みたいな「漢字＋カタカナ」というタイトル（正直、その当時似たようなタイトルが続出したという影響力も含めて発明だと思います）はどうかな？　と思ってそのパターンで10個くらい出したんですよね。で、結局いろいろ検討した結果『革命エデュケーション』が残ったという。なんで、こ

のタイトルは椎名林檎と東京事変に捧げます（笑）。

《革命エデュケーション》

前説

平成 24 年 6 月 23 日　発行
著　者　細井 正之・鵜川 龍史
編集者　鵜川 龍史・細井 正之
発行所　世田谷学園 国語科